

「数万人の心」と「万人の心」

岩崎雅彦

世阿弥は『風姿花伝』第三「問答条々」の最初の問答に、能の開始に際しての心得として、次のように記している。

神事・貴人の御前などの申樂に、人群集して、座敷いまだしづまらず。さるほどに、いかにもいかにもしづめて、見物衆、申樂を待ちかねて、数万人の心、一同に、「おそし」と樂屋を見るところに、時を得て出でて、一声をも上ぐれば、やがて座敷も時の調子に移りて、万人の心、為手のふるまひに和合して、しみじみとなれば、何とするも、その日の申樂は、はやよし。

神事や貴人の前での能の際に、観客が多くなり、客席がまだざわついている場合、十分に静まるのを待ち、観客が能の始まるのを待ちかねて、多くの人が一同に、「遅い」と思つて樂屋の方を見る時分に、ここぞとばかりに出て、一声を謡い出すと、すぐに客席も時の調子に移つて、観客全員心が為手の演技に和合して静まる。こうなると、どのように演じて、その日の能はもう成功である。

世阿弥は、この文章の中で、多くの見物衆を「数万人」という言葉で表現している。数万人の観客を集める公演といえは、現代では東京ドームや国立競技場などでのコンサートがあるが、当時それほど大規模な能の公演が行われていたとは考えにくい。「数万人」が実際の観客数ではなく、多分に誇張を含んだ定型的表現であることは、直ちに理解の及ぶところであろう。金井清光氏は『風姿花伝詳解』で、この語に関して、野外で行われた大規模な勧進能でも、観客数は三千人を超すことはなかったであろうと推測されている。

「数万」は、『日本国語大辞典』（小学館）など、現代の主要な辞典類には、そろって「二、四万から五、六万」としているが、この説には明確な根拠はなく、多分に経験的、感覚的な数値であると思われる。豊臣秀次の命によって編まれた最初の謡曲注釈書である『謡抄』の「頼政」の項目には、「数万騎（の兵）」の語について、「数万ハ、五万ヨリ上、十萬ノ内也」と説明している。「数万」は、かつては現在の感覚よりも、かなり多い数を指していたようであ

る。そうであるとすると、『風姿花伝』の「数万人」という観客の数も、三万人から六万人程度という現在の通念よりさらに多く、五万人から十万人近くという数を示していたことになる。

現代の主要な辞典類は「数万」の語を項目として立てているが、「数万人」を項目としているものはない。「数万（騎）」は、軍記の合戦場面における大軍の定型的表現として使われることが多く、辞典類にもそれらが用例として挙げられている。「数万の軍旅」（『平家物語』）、「数万の寄手」（『太平記』）、「数万の夷」（『能草薙』）などの例があり、「数万の」は他にも、「兵」（『軍兵』）などの語に続く場合もある。また「数万人の敵」（『太平記』）や、「数万騎の夷」（『能小鍛冶』）などの用例も見られる。

このように、これまでに報告されている「数万（人）」の用例は、合戦場面の描写に集中している感があるが、それ以外の用例も見出すことができるので、以下にそれらについて述べることにする。

『直談因縁集』は、天正十三年（一五八五）に常陸最勝寺の天台僧、舜雄が書写した『法華經』の注釈書である。その「序品」の部分に「数万人」の用例が四例見られる。一・四十二話では、大唐の「分ノ国」が「平ノ国」との合戦に負け、負傷者を多く出したのを、薬師如来が哀れみ、老人の姿に変じて現れ、医王山の麓の大石の下に葉があると教える。

サレバ、数万人寄セテ、此ノ石ヲ取ルニ、取り得ズ。

数万人で掛かって、石を取り除くことができな。老人が一人でこれを取って捨てると、薬の入った瑠璃の壺が現れる。老人は、我先に争って薬を取ろうとする人々に、そのように欲深いから乱国となるのだと諭す。

続く一・四十三話は、『阿含経』を典故とし、『今昔物語集』巻九・四十六話などにも見える話である。この話では、三人の人が急流の大河の中に家を建てるように命じられ、石を置くが押し流されてしまう。

或ハ、数万人ヲ以テ、石ヲ集ムルニモ、留マラザル時、「所詮、人力ニハ叶フベカラズ。仏天ニ祈ラン」ト云テ、

数万人掛かりで石を集めても流されてしまい、人力では無理とあきらめ、仏天に祈る。四十二、四十三話とも、「数万人」という表現は、定型的表現を踏まえた説話的誇張と理解できる。

一・四十七話では、天竺武当山の恵表比丘が数年間『法華経』を読んでいると、三界の天衆が数万人現れる。

ウツツニ、三界天衆、数万人来ル。これらの天衆は、もとはこの山に住む禽獣であったが、恵表が読む法華聴聞の功德によって天上に生まれ、その報恩のためにやって来たのだった。

一・五十話は「真福田丸説話」として知られ

る著名な説話で、『今昔物語集』巻十一・二話等の同話である。行基菩薩の説法を聴聞しようとする多くの人が集まる場面の描写に次のように記す。

時ニ、引導ノ説法ヲ聴聞セント、数万人集マル。

これももちろん誇張・定型的表現であるが、特定の場に、ある目的を持った人々が多く集まるという点で、演能の場と共通性を持っていると言える。説法の場が芸能の場と類似性を持っていることは改めて言うまでもないであろう。説経者と聴衆の関係は、役者と観客の関係にも置き換えられる。そのような点で、一・五十話の「数万人」は、他の用例に比べ、『風姿花伝』の用例に最も近いと言えるだろう。

『直談因縁集』では、「数万人」の用例が、たまたま近い場所にまとまって見られるが、これによって、この語が頻繁に使用される定型的表現であることが、改めて確認できる。

「数万人の敵」も「数万人の心」も、「数万人の〇」という形で、下に来る名詞に続くが、「数万人の敵」という表現の場合、「数万人」は、敵の数を表す。すなわち下に来る語は、「数万人」の構成要素である。これに対し、「数万人の心」という表現は、「数万人」がそれぞれに持っている各人の心という意味であり、「敵」に掛かる用法とは異なる。この場合、「数万人」は、下に来る語の所有主と言う関係になる。これは下に来る語の数を表す用法に比

べて、珍しいと言えるだろう。

「心」は世阿弥能楽論でよく使われる重要語句の一つであるが、「数万人」と「心」を組み合わせた「数万人の心」という用例は、他には見つかっていないようである。「問答条々」には、小野小町の「色見えで移るふものは世の中の人の心の花にぞありける」の歌が引かれる。また「人の心」という言葉は、世阿弥の作品にも見られる。小町の歌を踏まえた「人の心の花や見ゆる」（「関寺小町」）を始め、「そもかかる人の心か」（「砧」）、「人の心の迷ひを乾すは」（「当麻」）等がある。

前掲の引用部分には「万人の心」という語も使われている。「数万人」と「万人」は、字面はよく似た言葉だが、意味は異なる。「万」は、「万事」「万物」「万象」「万般」「万端」「万民」などのように、数の多さを表すのではなく、「あらゆる」「すべての」という意味の熟語を形成する文字である。したがって『風姿花伝』の「万人の心」は、その場にいる観客全員の心という意味になる。「数万人」は多くの観客、「万人」は数の多少に関わらず、その場の全員という意味でそれぞれ使われている。

「数万人」の用例は多くあるが、その「心」に着目した発想は、世阿弥独自のものと言えるだろう。世阿弥は観客一人一人の意識と、それが総体化した時に生みだされる場の雰囲気や状況について考察を巡らしている。

（国学院大学非常勤講師）